

ディナー皿大ヒット

第6部 陶磁器を世界へ〈5〉

時流の先へ

中部財界ものがたり

工場内に険悪な空気が流

れていた。純白のディナー

セットが実現しないまま、

日本陶器で開発を担う技師

長の飛鳥井孝太郎（故人）

の一派が、新進気鋭の技術

者、江副孫右衛門（故人）

を排除しようとする。江副

は生地や窯など幅広い研究

に精を出していた。飛鳥井

は「新入りの後輩に手をつ

けられては俺の顔にかかわ

る」と嫌う。「江副を殴る

計画がある」といううわさ

まで流れ、江副は「辞める

しかない」と言い出す。

一九一〇（明治四十三）

年。森村組（現森村商事）

創業者の森村市左衛門と義

弟の大倉孫兵衛が皿の色を

めぐって大げんかした翌年

のこと。孫兵衛の長男で日

本陶器社長の和親は、飛鳥

井と江副のどちらを重用す

るか判断を迫られ、飛鳥井

を解任する。

「同業の製陶業を起こす

のはやましく、文筆業に専

念する」。会社を去る際、

こう語る飛鳥井に、市左衛

門は広い心を見せる。「引

退には早い。日本に陶器工

場がほかにないのは国家の

ため残念だ。日本陶器以上

の工場を起こしてくれ」

すると飛鳥井は、子飼いの

工場幹部約三十人を引き

連れて、名古屋の陶磁器貿

易商が設立した帝国製陶所

（現鳴海製陶）に移ってし

まった。

この解任劇は会社に大打

撃を与える。工場の立て直

しに当たった伊勢本一郎

（故人）の著書「近代日本陶

業発展秘史」には「日本陶

器には常にスパイが入れら

れ、新事実が逐一、帝国製

陶所へ伝わった」とある。

和親は二二年に、開発担

当者となっていた江副らと

欧州に渡り生地を研究し直

す。ベルリンのゼーゲル研

究所の博士、クラマーから

「良質な外国産粘土を混ぜ

ると純白で加工しやすい生

地ができる」と教わる。帰

国後、指示通りに焼いた皿

は見事に真っ白となった。

だが、もう一つ問題があ

った。ディナーセットの中

心となる直径二十五センチ

の皿は、焼くたびに歪んで

くる。二十年、ついに真っ

白で平らなディナー皿が出

て来た。

森村商事の社史による

と、それが解決したのは翌

一三年七月の暑い日。悩ん

だ伊勢が、思い余って見本

用のフランス製の高級皿を

半分に分けると、皿の中心

向かうにつれて生地が厚く

だけが、焼いている途中で

底がくぼみ、平らな皿にな

らなかった。

「こりゃあ反対じゃない

か。一体どういうわけだ」。

驚く伊勢に江副は穏やかに

言う。「このやり方で焼い

てみましょう」。焼き上が

った皿を見るや、江副は

「できた、できたぞ」と皿

を握り締め、和親へ駆け寄

る。開発を始めてから苦節

二十二年、ついに真っ白で

平らなディナー皿が出来上

がった。

鳴海製陶 1911（明治44）

年に発足した帝国製

陶所の流れをくむ洋食器メ

ーカー。帝国製陶所

の発足時に、元日本陶器技

師長の飛鳥井孝太郎

が技術者として招かれた。

その後、台風で工

場が被害に遭ったため、名

古屋製陶所に社名を変え再

建した。43年に住友金属工

業が名古屋製陶所の工場を

買収し、46年に鳴海製陶

を創業。

56年に高級磁器のポーン

チャイナの量産に成功。「ナ

ルミ」の名前でノリタケと

ともに世界的に知られる洋

食器メーカーとなった。

内紛乗り越え 悲願の開発

った。和親らの目に涙があ

ふれた。

青と赤の小さな花の絵を

あしらった国産初のディナ

ーセットを「セタン」と名

付け、一四年に米国で売り

出す。その年に始まった第

一次世界大戦で戦場となっ

た欧州で洋食器生産が激減

したおかげで、セタンは飛

ぶように売れる。一四年に

二千組だった輸出は一八年

に四万組、二一年には六万

組と増え、日本から米国へ

の洋食器輸出の六割を森村

組が占めた。

市左衛門の弟・豊のひ孫

で森村商事社長の森村裕介

（五七）は「実用的な食器でブ

ームを起こし、米国に森村

組の名が広がった。製造業

としても一大転機となっ

た」と開発成功の意義を語

る。当時、森村組と日本陶

器が手掛けた洋食器などが

現在、「オールドノリタ

ケ」として国内外のコレク

ターから高い評価を受けて

いる。（文中敬称略）

「時流の先へ 中部財

界ものがたり」の過去

の記事は、中日プラス

（chuplus.jp）で閲覧

になれます。



日本陶器が製造した国産初のディナーセット「セタン」=名古屋市西区のノリタケミュージアムで